

近代ドイツ語圏における日本語教本のローマ字表記

——1900 年前後の教本類をもとに——

柄田千尋

19 世紀以降、ヨーロッパでは比較言語学研究が進展し、日本開国以降は対日外交にも注目が集まる中で、日本語への関心は高まりをみせた。またそれに伴い、19 世紀終盤からはヨーロッパ各地で学習者用の日本語教本が刊行されるようになる。これらには日本語の発音や文法などに関する記述、読み物、単語集などが収録されており、近代日本語の口語・文語のほか、当時のヨーロッパの人々が日本語をどのように理解し、学んだかを窺うことができる。

本発表では、ヨーロッパの中でも比較的早い時期から盛んに教本が刊行されたドイツ語圏（ドイツ、オーストリア）の日本語教本に注目し、ローマ字表記の特徴を調査して明らかになった点を報告する。ローマ字に注目したのは、ドイツ語圏の教本のローマ字綴りには、他の洋学資料や、日本の雑誌等で使用されたヘボン式・日本式の綴りとは異なる特徴が見られたためである。ドイツ語圏の日本語教本に関しては、個別の教本を詳しく扱った研究がある一方で、教本間の関係や他地域の教本に与えた影響については明らかでない点も多い。そのため本発表では、ドイツ語圏の初期の日本語教本のローマ字表記を特徴ごとに分類し、分析することで、教本に使用された綴りの種類の変遷や、各教本間・他資料との関係を捉えようと試みた。

今回対象としたのは、ドイツで最初の日本語教本の刊行年である 1886 年から 1910 年の間にドイツ語圏で初版が刊行された教本 11 種類である。

それらの資料のローマ字表記を調査した結果、綴りの特徴はおおよそ時期ごとに類別できることが分かった。まず、1890 年までに刊行されたノアック『日本語教本』（1886）など 2 教本では、ド

イツ語の発音に即した子音字が用いられるなど、独自の綴字の使用がみられる。ただ、この綴字が後年の教本に与えた影響は小さいとみられ、一方で 1890 年以降の 9 教本のうち 8 教本ではベルリン大学の教本を起点として、日本の羅馬字会の制定したローマ字表記を改変した綴りが使用されている。

この綴りに特徴的なのが、母音の無声化をアポストロフィで表す表記（mash'ta「ました」など）である。符号の位置を調査したところ、基本的には語末か無声子音が後続する音節で用いられており、一般に無声化が生じやすいとされている音節に合うことが確認された。しかし、近代の他の複数の語学書・辞書で無声化する音として言及されたり、符号で無声化が表されたりする「ヒ」（hi）にアポストロフィが用いられない点は、音声の実態と対応しているとはいいがたい。また、他の符号の位置からも、符号を付すか付さないかには音声だけでなく形態的な要因が関与していることが指摘できる。

このように羅馬字会の方式を改変した綴りは、ドイツ語圏教本の仏訳や英訳にも用いられ、さらに 1900 年代にフランスで刊行された教本でもこの綴りを取り入れた本が確認される。こうしたことから、ドイツ語圏の教本のローマ字表記は、同時期の他言語圏の教本にもある程度の影響力を持ったものであったことが推測される。